

群 教 セ	G12 - 01
	平 17.225集

対象とのかかわりを深め、価値ある 気づきを促す生活科指導

－ 物語で展開する「なりきり活動」を取り入れて －

長期研修員 渡邊 恵子

（研究の概要）

本研究は、活動を物語で展開し、自分の思いや願いが自由に表出できる「なりきり活動」を取り入れることで、対象と自分が身近な存在に感じ、深くかかわれるようにしたものである。具体的には、意図的に物語の主人公を登場させたり、対象を擬人化したりして、児童を活動へと引き込むものである。そこから生まれる児童の思いや願いは、切実感があり、価値ある気づきが促せることを実践研究したものである。

キーワード【生活科 物語展開 なりきり活動 自己表出 気づき】

主題設定の理由

これから社会の変化がより一層激しくなる中で、いかに自己をしっかりと自分らしさを表現できるか、いかに困難な問題に柔軟に対応できるかという資質・能力を身に付けることがますます重要になってくる。

生活科では、身近な人や社会、自然と直接かかわる活動や体験を通して、抱いた思いや願いの実現のために、失敗を恐れず問題解決をしていこうとする力を育てることが大切である。

児童は、生活科の学習の中で、解決しなければならない問題が生じたときに、対象とのかかわりが深まり、自分たちで思考を働かせて意欲的に問題解決していこうとする。また、対象と自分が深くかかわるほど、そこから生まれる気づきは切実感があり、活動に没頭していくのである。

一方で、活動が表面的になり、単に「おもしろかった」「よかった」で終わってしまうことがある。それは、目的意識をもって活動できるような投げかけが十分でなかったり、活動を通して、問題意識を醸成するような問いかけが弱かったりしたためと考えられる。

そこで、本研究では、活動が児童にとって価値あるものと思えるような投げかけをしたり、対象を身近な存在として受け止め、問題意識をもって、対象と深くかかわっていけるような支援の工夫に焦点を当てて研究を進めていくこととした。

まず、対象に触れ、問題意識を醸成する過程で

は、教師が意図的に物語の主人公を登場させたり、対象を擬人化したりして、児童を物語の中に引き込む。そして、活動への興味・関心を高めるようにする。

次に、対象とのかかわり、気づきが生まれる過程では、児童の思いや願い、気づきや発見が次の活動に広がるように支援し、対象への見方や考え方を明確にできるようにする。

さらに、活動を振り返り、自己を見つめる過程では、活動を物語で展開してきたことを自由に表現できるようにし、対象と深くかかわってきた自分や一緒に頑張ってきた友達がいたことに気付くようにする。

以上のことから、活動を物語で展開する中で、問題意識をもって、繰り返し対象に触れることで、対象と自分が身近な存在になり、対象と深くかかわることができる。そして、そこから生まれる気づきは価値あるものになると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

活動を物語で展開する中で、児童が思いや願いをもち、自由に表出できる「なりきり活動」を取り入れることは、対象と深くかかわり、価値ある気づきを促していくのに有効であることを、実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 対象に触れ、問題意識を醸成する過程において、「なりきり活動」を取り入れれば、対象と自分が身近な存在になり、活動への興味・関心が高まり、対象と意欲的にかかわろうとするであろう。
- 2 対象とかわり、気付きが生まれる過程において、「なりきり活動」を取り入れ、児童の思いや願い、気付きや発見が次の活動に広がるように支援をすれば、試行錯誤しながら児童自ら問題解決をしていくことができるであろう。
- 3 活動を振り返り、自己を見つめる過程において、「なりきり活動」を取り入れ、自由に表現できるようにすれば、活動全体を振り返り、対象と自分や友達と自分が深くかかわってきたことに気付くことができるであろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 生活科において「対象とのかかわりを深める」とは

活動していく中で、「試行錯誤しながら工夫したり創造したりするなど、思考を巡らせながら活動に没頭する姿」を対象とのかかわりが深められた姿ととらえた。

具体的な児童の姿として、次のように考えた。

まず、児童が対象と出会い、そこで、「おや?」「おもしろそう」「やってみたいな」「どうすればできるかな?」と思考を巡らし、試しの行動を始める。

次に、活動を進めていく中で、「なぜだろう?」「ふしぎだな?」という思考が生まれ、そこから「調べてみよう」「やれそうかな?」「前にやったことに似ているな」「前とは違うかな?」など疑問をもち、自力解決していこうとする心の動きが生まれる。

さらに、活動を進めていくと「こんなことが分かったよ」「こんなにがんばったよ」「もっとしたいな」という自己を見つめる行動や生活に生かした行動へと発展していく。

このように児童は、活動に興味・関心を強くもつことができれば、対象と自分を身近な存在に感

じ、そこから生まれる思考や気付きは切実感があり、生活に結び付いた価値あるものになる。このような姿が、対象とのかかわりを深めた姿であると考えた。

(2) 物語で展開する「なりきり活動」とは

単元全体を物語のようにつなげて構成し、教師が意図的に架空の人物を登場させたり、架空の場面を設定したりして、児童を活動に引き込むようにしたものである。児童はその中で、対象を擬人化したり、自分が物語の登場人物になりきったりして、対象と深くかかわることができる活動である。これが「なりきり活動」である。

この活動は、幼児期の現実世界の願望や夢に物語性を加え、イメージの世界を創っていく中で、自分なりのこだわりをもち、役割を演じていく遊び「ごっこ」を発展させたものである。また、この活動は、設定された場面の中でねらいを達成するために、試行錯誤しながら対象と自分を深くかわらせ、そこから生まれる気付きを大切にしていけるものである。

図1は、「ごっこ」と「なりきり活動」の関係を示したものである。

このように考えると「なりきり活動」は、児童期前期という発達段階において

でも、自己を表出して、活動に没頭するのに有効な手だてになっていくものとする。

次に、活動を物語で展開する過程での「なりきり活動」について示していきたい。

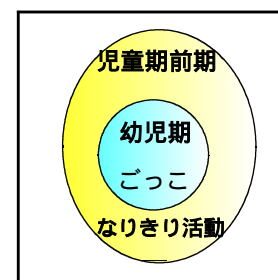
対象に触れ、問題意識を醸成する過程での「なりきり活動」

この過程での「なりきり活動」とは、設定された物語の中で、対象を擬人化したり、自分が物語の中に入り込み、活動に興味・関心をもち、対象と深くかかわる活動である。

対象とかわり、気付きが生まれる過程での「なりきり活動」

この過程では、活動の中で、自分の思いや願いを明確にして、つぎの活動へと広げていくために、カードに記録していく活動である。このカード（「なりきり記録カード」）は、ただ記録してい

図1「ごっこ」と「なりきり活動」



くだけでなく、活動の見通しをもたせるための示唆の役割もある。

具体的には、図2に示した通りである。「なりきり記録カード1」は、活動の際、児童が虫博士や植物博士、カメラマンになったつもりで記録するものである。

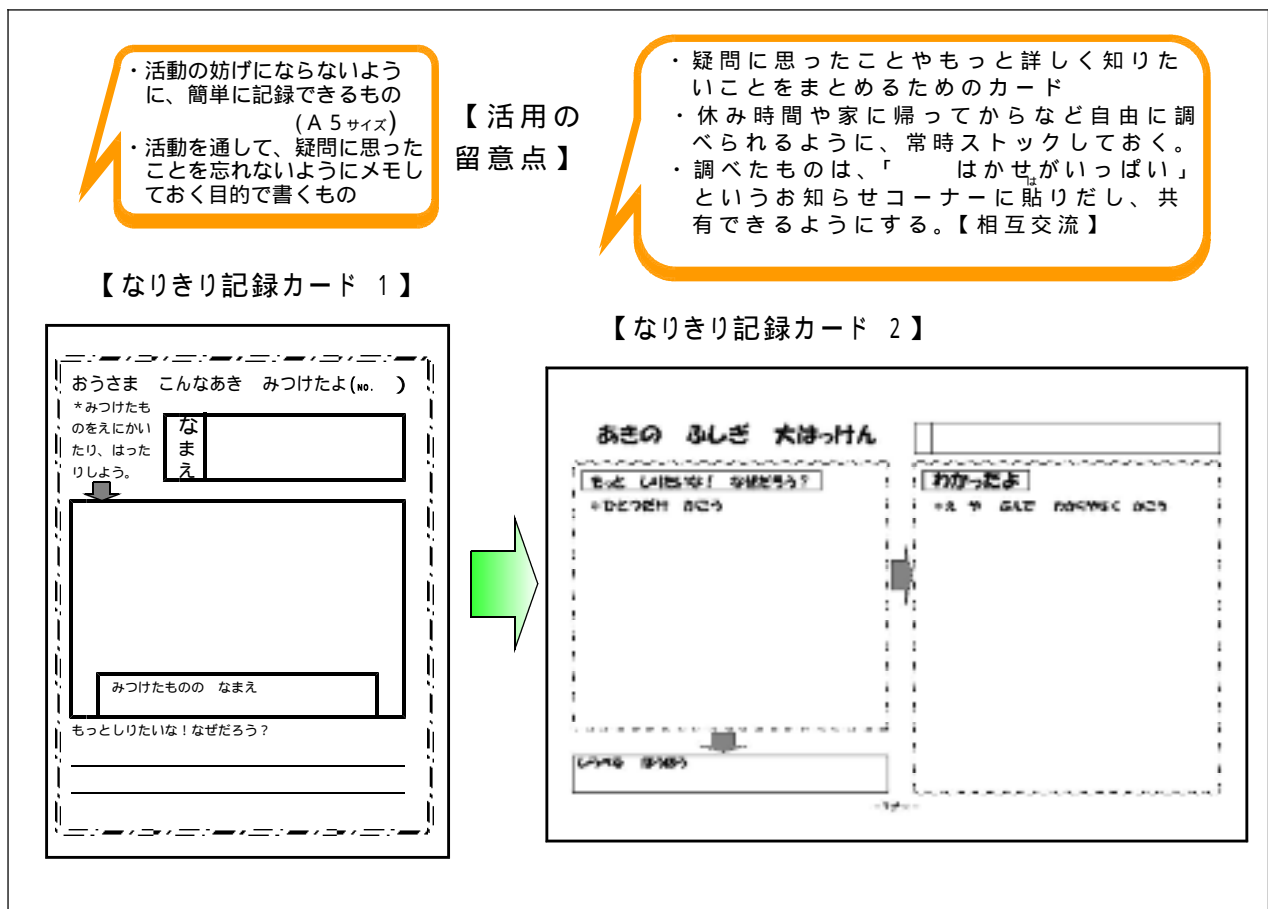
「なりきり記録カード2」は、前時に活動した中で不思議に思うことやもっと知りたいことを、自分で調べ、解決していく過程で利用するもので

ある。このカードは、休み時間など自由に利用できるようにする。

ほかにも活動を充実させるための補助的なカードとして、物語の主人公（王様）に、活動したことを報告するという設定で、自分が物語の中に入り込んで、表現できる「なりきり記録カード」もある。そのカードは、児童が活動の様子を相手に分かりやすく伝えたいという目的意識をもって、表現することができるものである。

（詳細は資料編参照）

図2 「なりきり記録カード」



活動を振り返り、自己を見つめる過程での「なりきり活動」

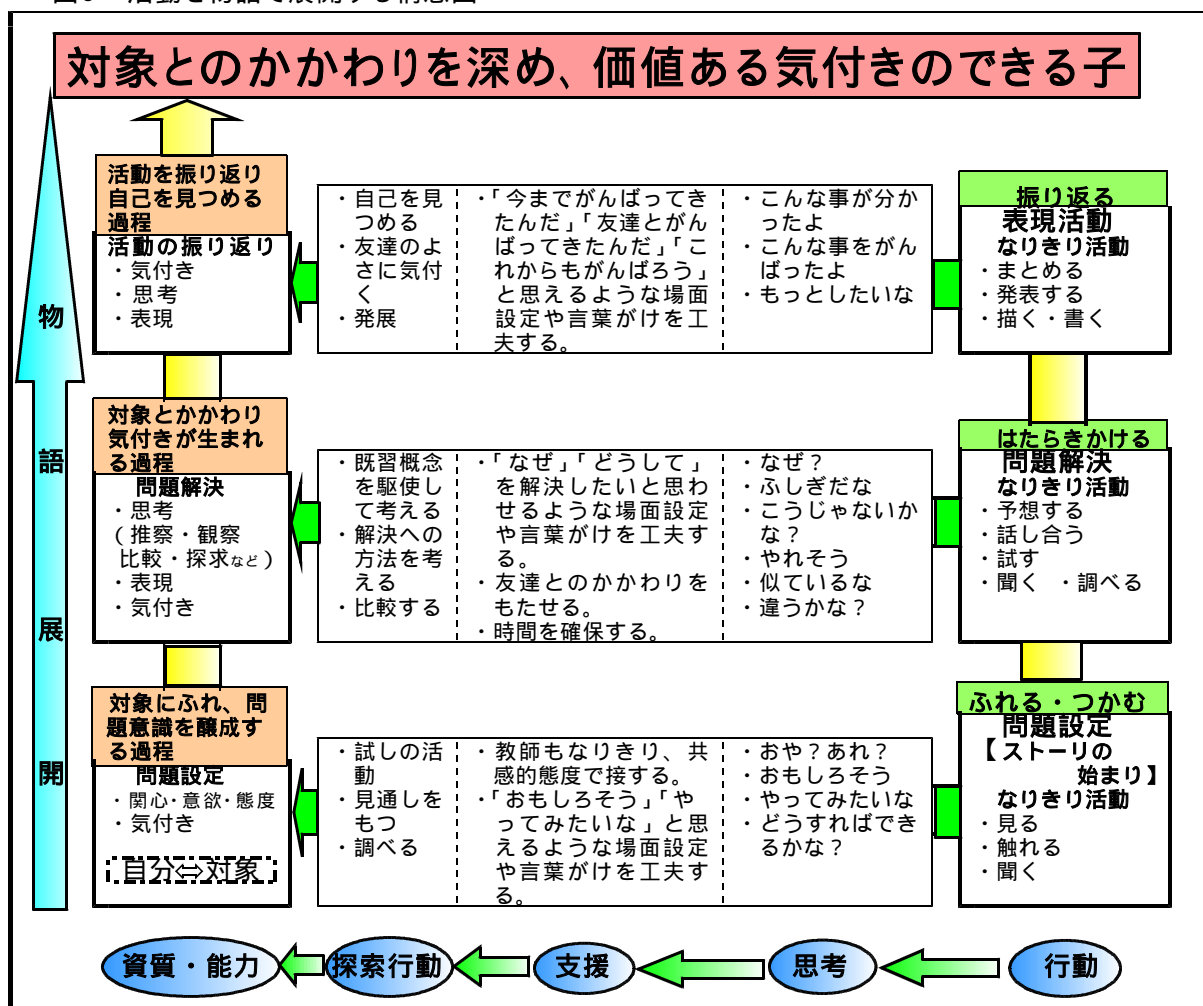
この過程では、これまでの活動を振り返り、自分の思いを自由に表現する「なりきり活動」を取り入れる。この活動は、対象を擬人化したり、自分が物語の中に入り込み、物語に合った人物になりきったりして、対象を身近な存在として受け止め、表現するものである。このように自分の思いを自由に表現することで、対象と深くかかわってきた自分や一緒に頑張ってきた友達に気付くこと

ができ、そこから生まれる気付きは切実感があり、価値あるものになると考える。

図3は、物語で展開する活動「なりきり活動」をまとめた構想図である。

この図は、単元を物語で展開していく中で、児童の活動「なりきり活動」から生まれる思考の流れに沿って、教師の支援を行うことで、活動が充実し、対象とのかかわりが深まっていくことを示したものである。

図3 活動を物語で展開する構想図



2 研究の方法

(1) 授業実践計画

対象	太田市立宝泉小学校 1年2組28名	期間	平成17年10月中旬～11月下旬	時間	21時間
授業者	長期研修員 渡邊 恵子	単元	はっばの いるが かわったよ		
抽出児A	対象への観察力や気づきは深く、優れているが、体全体を使って、自然とかかわることに対し、消極的になってしまう。そこで、自然の中で、活動に没頭できるよう支援していきたい。				
抽出児B	いろいろなことに興味・関心をもち、活動も積極的であるが、気づきの深まりに課題がある。対象を身近な存在として感じ、自己を表出できるように支援していきたい。				

(2) 検証計画

検証計画	検証の観点	検証方法
見通し1	対象に触れ、問題意識を醸成する過程において、「季節の王様」(春、夏、秋)という架空の人物を登場させ、児童が「季節の国」に入り込めるような「なりきり活動」を取り入れることは、児童が興味・関心をもち、問題意識をもって、意欲的に活動していくのに有効であるか。	・行動記録 (ビデオによるポートフォリオ) (発言やつぶやき)
見通し2	対象とかかわり、気づきが生れる過程において、「王様(外部講師)」を登場させたり、児童自らの思いや願いが次の活動に広がるような「なりきり活動」を取り入れたりは、試行錯誤しながら問題解決をしていくのに有効であるか。	・「なりきり記録カード」 (思いや願い、気づきの深まりをみる)
見通し3	活動を振り返り、自己を見つめる過程において、これまでの活動の中で気付いたことや楽しかったことを絵本や劇など自由に表現する「なりきり活動」を取り入れることは、自然と自分や友達と自分が深くかわってきたことに気付くことができるようになるのに有効であるか。	・作品 ・発表

研究の展開

1 単元名 はっぱの いろが かわったよ

2 単元の考察 (詳細は資料編参照)

本単元は、学習指導要領の内容(5)「季節の変化と生活」(6)「自然や身近にあるものを使った遊びの工夫」に基づいて設定した。ここでは、季節の移り変わりを体全体で感じ、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできる児童の育成を目指している。

児童は、1学期の「あそびにいこう」の単元で、春と夏に公園に行き、それぞれの季節の中で、自然に親しみながら遊んできている。草花遊びや虫採りをして、春や夏という季節の特徴に触れてきた。しかし、そのことが季節が移り変わるにつれて、変化していることには気付いていない。また、遊びも個人的な活動が多く、友達と協力して遊びを工夫する楽しさを味わうところが不十分であった。

そこで、児童が身近な自然とのかかわりを深め、季節の移り変わりや不思議さ、面白さなどに気付けるようにするとともに、自分たちの遊びや生活を工夫したりすると楽しいことに気付けるようにすることが必要であると考えた。

本単元では、児童が身近な自然と深くかかわれるように、それぞれの季節の国を設定し、王様が登場したり、児童が季節の国の住民になったり、自然のものに変身したりする「なりきり活動」を取り入れ、自然と親しめるようにする。また、季節の移り変わりを物語としてつなげることで、変化の様子を意識させ、気付きを深めていけるようにする。

以上のことから、この活動を通して、児童は対象を身近な存在としてとらえることができ、自然に興味・関心をもって積極的にかかわれるようにすることは、自然を大切にしようとする心や、自分たちの遊びや生活を豊かにしようとする気持ちを育てる上で意義あることと考える。

3 目標及び評価規準

○ 秋の遊び場での遊びや草花、木、虫などの自然とのふれ合いを通して、生活や自然の中に見られる季節の変化に気付き、自分たちの生活や遊びを工夫して楽しむことができる。

	生活への関心・意欲・態度	活動や体験についての思考・表現	身近な環境や自分についての気付き
内容のまとめ ごとの 評価	<ul style="list-style-type: none"> 意欲的に身近な自然を観察したり、生活を工夫したりしようとしている。 身の回りの自然や身近にある物を利用して、楽しく遊ぼうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 季節の変化に応じて、自分たちの生活を工夫しながら、楽しむことができる。 身の回りの自然を利用して、生活に生かした物を作ったり、遊びを工夫したりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 四季の変化や季節によって生活や自然の様子が変わること気付く。 身の回りの自然や身近にある物を利用して、みんなで遊ぶと楽しいことに気付く。
単元の評価 規準	<ul style="list-style-type: none"> 身近な自然とかわる活動を繰り返す中で、季節の変化を利用して、生活を工夫しようとしている。 身近な自然を利用して、遊びを作り出す楽しさや夢中になって遊ぶ楽しさを味わっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 季節の物を利用して、自分たちの生活をよりよくしていく方法を考えることができる。 自然の物を利用して友達と一緒に遊ぶために遊び方を工夫したり、約束やルールを考えたりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 季節の移り変わりに気付き、そのことは自分たちの生活に結び付いていることに気付く。 秋の自然物や身の回りにある物を利用して遊びを工夫すれば、楽しいことに気付く。
学習活動 における 具体的な 評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 五感を使いながら、グループの友達と協力して、秋の秘密を進んで見つけようとする。 秋探しの活動の中で、疑問に思ったことや分からないことなどを進んで調べたり質問したりする。 自然の中で、体全体を使って、遊びを工夫しながら楽しく遊ぶことができる。 見付けてきた自然物や身の回りにある物を利用して、意欲的に作ったり、遊んだりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 秋探しの活動を通して感じたこと、分かったこと、不思議に思ったことなどをカードに分かりやすく書くことができる。 秋の自然物や身の回りにある物を使って、遊びを工夫することができる。 遊び方の工夫や遊びのルールを考え、みんなで遊びを楽しむことができる。 活動を振り返り、季節の特徴を遊びや生活に生かしていくと楽しいことなどをカードに分かりやすく書くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 校庭や公園の自然の様子が、春や夏とは違い変化していることに気付く。 秋探しの活動の中で、見付けた自然物や身の回りにある物を利用してみんなで遊びを工夫すると、楽しいことに気付く。 活動を振り返り、頑張った自分や友達と協力して遊ぶと楽しいことに気付く。

4 指導計画（全21時間）+ 国語科6時間

過 時 程 間	学 習 活 動 ねらい 丸数字は主活動 補助活動	支 援 及 び 指 導 上 の 留 意 点 指導上の留意点 特に配慮を要する児童への支援	規 準			学 習 活 動 に お け る 具 体 的 な 評 価 規 準	評 価 資 料 方法
			関 意 態	思 ・ 表	気 付 き		
対 象 に ふ れ 1 見 通 し 1	1 物語の始まり 春と夏を振り返り、季節の変化に気付くことができる。 【春と夏の国の王様からの手紙】 自分たちが体験した春や夏の様子を王様に分かりやすく報告する。（発表）	王様からの手紙の内容に季節を感じられるような視点を盛り込み、季節の変化に着目できるようにする。 友達の発言を聞いたり、ビデオや写真から思い出せるよう言葉がけをする。				春・夏の活動を振り返り、それぞれの季節の特徴が分かり、季節が変化してきたことに気付く。	・ワークシート
	2 秋の国の王様からのメッセージ 「王様の秋探しゲーム」を通して、草木や落ち葉、虫など五感を使って触れ合い、秋の季節を感じ取ることができる。 【秋の国の王様から声のメッセージが届く】	「秋探しゲーム」の問題を擬人化して、児童が自然の物に親しめるようにする。 児童の発言の言葉に耳を傾け、自然の中での発見を共に喜び合うようにし、活動への意欲をもたせる。				「あきさがしゲーム」を通して、五感を使いながら、グループの友達と協力して、秋の秘密を進んで見つけようとする。	・観察 ・問題カード（グループごと） ・秋探しチェックカード（自己評価カード）
対 象 と か か わ り 気 付 き が 生 ま れ る	2 3 王様の登場 春・夏と遊んだ公園で、身近な秋を、五感を使いながら、意欲的に探することができる。 探した秋を記録する。（一人5枚を目標に探す。 《なりきり記録カード》 ・発見したこと ・疑問に思ったこと ・分からないこと など	【王様】自然のことに詳しい人に頼んでおく。 【外部講師の活用】 活動が途切れないで、自分の思いや願いが自由に選択して書けるようにカードを用意しておく。 図鑑に載っているような物を見付けたり、友達と交流したりするように言葉がけをする。				秋探しの活動を通して、感じたこと、分かったこと、不思議に思ったことなどを「なりきり記録カード」に分かりやすく書くことができる。	・「なりきり記録カード1」 ・観察
	1 秋探しの中で、疑問やもっと知りたいことを詳しく調べることができる。 《なりきり記録カード》	秋探しの中で、もっと知りたいことを取り上げて、調べる時間を確保し、自力解決できるようにする。				秋探しの活動の中で、疑問に思ったことや分からないことなどを進んで調べたりする。	・「なりきり記録カード2」 ・観察
1	1 自然の中での遊びの計画を立てることができる。	* 略				* 略	* 略
2	4 王様の秋の国で遊ぼう 自然の中で遊びを工夫して、みんな楽しく遊ぶことができる。	秋を体全体で感じられるように言葉がけをする。 活動の様子をできる範囲でビデオに撮って、振り返りの場面で活用できるようにする。				計画に沿って、自然の中で体全体を使って、遊びを工夫しながら楽しく遊ぶことができる。	・観察（ビデオによるポートフォリオ）
1	遊んだ様子を報告書にまとめる。 《補助的な「なりきり記録カード」》	活動した様子を王様に詳しく報告するという設定で、「なりきり記録カード」を意欲的に書けるようにする。				遊んだ様子や発見したことを絵や文で王様に分かりやすく書くことができる。	・補助的な「なりきり記録カード」
1	5 秋の国の王様を招待しよう	* 略				* 略	* 略
4	6 秋の国の準備	* 略				* 略	* 略
2	7 ためしてみよう	* 略				* 略	* 略
2	8 ぼくらの秋の国に ようこそ！ 招待した王様やみんなと仲良く、ルールを守って遊ぶことができる。	活動の様子やつぶやきを見取り、個に応じた指導助言をする。				工夫した遊びを、友達や招待した王様と仲良く、楽しそうに遊んでいる。	・観察 ・自己評価カード
活 動 を 振 り 返 り	6 国語 自己の振り返り 【国語科のねらい】 合科 見聞きしたこと、経験したことなどについて、順序よく思い出し、語と語や文と文との続き方に注意して書くことができる。	秋の国での活動を題材に、国語科との合科学習を取り入れる。				国語科の「書くこと」の評価のみ *生活科としての評価はしない。	
	1 9 絵本と劇の発表会 絵本班・劇班の発表を見たり聞いたりして、がんばった自分や友達に気付くことができる。 絵本班の児童が読み聞かせをし	友達の書いた絵本を読み、感想を書いて渡し、相互交流させることで、友達のよさに気付けるようにする。 読む視点を示し、内容につ				絵本班と劇班それぞれの発表を見たり聞いたりして、自然を利用して遊ぶと楽しいことに	・作品 ・絵本 ・劇 ・発表

自己をみつめる	見通し3	て、劇班の児童が感想をカードに書いて渡す。【相互交流】	いての感想を書くように助言する。				気付いたり、季節の変化を感じたり、友達と協力した自分に気付いたりすることができる。	
	1	今まで活動してきて、季節は移り変わっていくことに気付き、これからの生活に生かしていきたいという気持ちをカードに書く。	季節の特徴を生活の中に生かしていくと、楽しくなるといった気持ちをもてるような言葉がけをする。				活動を振り返り、気付いたことをカードに詳しく書くことができる。	・まとめカード ・自己評価カード

研究の結果と考察

- 1 対象に触れ、問題意識を醸成する過程において、「季節の王様」(春・夏・秋)という架空の人物を登場させ、児童が「季節の国」に入り込めるような「なりきり活動」を取り入れることは、児童が興味関心を持ち、問題意識をもって、意欲的に活動していくのに有効であるか

児童は、春・夏の校庭や公園で、草花遊びをしたり、虫探しをしたり、アサガオを育てたり、それぞれの季節に合った活動をしてきた。しかし、季節の変化によって、自然の様子や生活が変わっていくという気付きには至っていない。そこで、春・夏を振り返り、季節の変化に着目し、秋へとつながっていることを意識させ、活動を展開していくことが大切であると考えた。

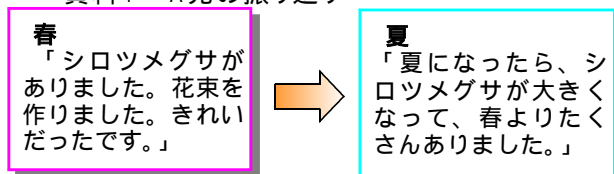
まず、春・夏を振り返るきっかけとして、「春の国の王様」から振り返りの視点が示された手紙が届いたという設定にした。手紙には、「風のおいほ、どうだったかな?」「どんな遊びをしたかな?」「どんな生き物がいたのかな?」「草や花はどうだったかな?」「王様の国では、・・・(春の国の紹介)」というように、児童が春に体験した活動を振り返りやすくなるような内容を盛り込んでおく。

このような投げかけにより、児童は、春の国の子どもになりきって、季節の特徴に目を向けて、振り返ろうという問題意識を持ち、意欲的に発表することができた。

さらに、夏も同様に、夏の国の王様から振り返りの視点が示された手紙が届いたという設定で、活動を振り返った。(詳細は資料編参照)

A児は、次のように振り返ることができた。

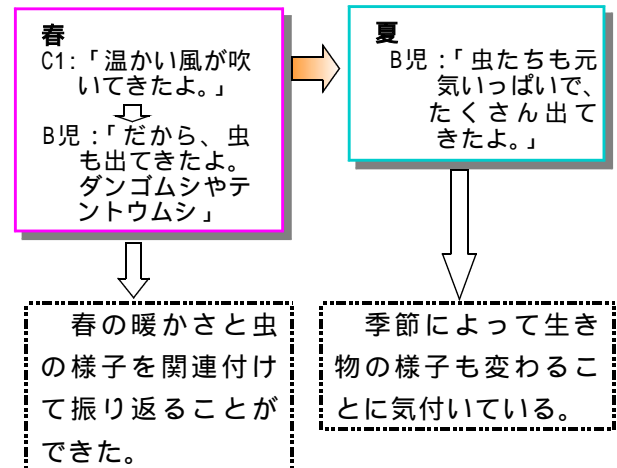
資料1 A児の振り返り



資料1から、A児は、春と同じ植物を取り上げ、季節の変化によって植物の様子が変わることに気付いていることが伺われた。これは、振り返りの視点を的確にとらえ、季節の特徴について問題意識をもち、意欲的に考えることができたためと思われる。

B児は、次のように振り返ることができた。(資料2)

資料2 B児の振り返り



さらに、秋の様子についても、A児は「秋なのにまだシロツメグサがあります。いつまでなのか?」や「暗くなるのが、早くなりました。」

B児は「バッタも成虫になって、大きくなってよ。」と季節の変化をとらえた発言をすることができた。

このように、王様の手紙の中に振り返りの視点を示したことで、季節の変化と自分たちの生活を結び付けたり、自然の様子細かい変化に気付く発言が多く出された。そして、春や夏をしっかりと振り返ることで、「秋という季節を、もっと知りたい」という関心が高まり、これからの学習に期待をもつことができた。

次の時間、秋の王様(外部講師)から声のメッセージが届き、「王様の秋探しゲーム(五感を使って、自然に触れる)」をすることが告げられると、秋の国の子どもたちになりきって、興味・関心を持ち、意欲的に活動することができた。

A児は、活動の中で、「王様が難しいって言っ

てたけど、がんばろうね。」と会話しながら、「秋の国」の子どもになりきって、意欲的に活動していた。また、「赤ちゃんの手の形をしている葉っぱは？」と自分の手を開いて見るなど、五感を使い、思考を働かせながら取り組む姿が見られた。

B児は、「青や紫のピーズのような実なんて、分かんないよ。王様の問題は難しいな。」とか「コーラのおい^ほにする葉っぱなんてあるの？見付けたら、王様は替^かめてくれるかな？」と王様を意識して、物語の中に入り込み、最後まで諦めずに、何とか解決しようとがんばることができた。

写真1「王様の秋探しゲーム」 このように児童は、秋の国の子どもになりきって、王様の問題を一生懸命解こうとしていた。自分たちがまるで秋の国に行ったかのように、校庭全体を駆け回って、意欲的に自然とかかわることができた。その後、休み時間も利用して、解決できなかった問題を解こうとしているグループもあり、「なりきり活動」を取り入れたことは、問題意識をもって、意欲的に活動していくのに有効な手だてであったと考える。

2 対象とかかわり、気付きが生まれる過程において、「王様(自然に詳しい外部講師)」を登場させたり、児童自らの思いや願いが次の活動に広がるような「なりきり活動」を取り入れたりすることは、試行錯誤しながら問題解決をしていくのに有効であるか

児童は、「秋探しゲーム」で五感を使うと不思議なものが見付かることを知り、自分たちで自由に秋のものを見付けたいという意見を出した。そこで、春・夏と遊んだ公園に行き、秋探しをすることになった。

この活動を通して、さらに児童の自然への気付きが深まるように、「秋の国の王様」を登場させて、一緒に秋の不思議を探してもらおうようにした。事前に外部講師と打ち合わせをし、秋の国の王様になりきって、一緒に活動して欲しいことを伝えた。(打ち合わせ事項は、資料編を参照)

当日、児童の前に王様が登場するという設定にし、本時の活動への興味・関心を高めた。そして、秋探しの視点を示すため、事前にお問い合わせを

いた「王様の〇×クイズ」をしてもらった。児童は、普段何気なく見ている身近な自然について知らないことがたくさんあることに気付き、その後の秋探しの活動を王様に質問しながら、意欲的に取り組むことができた。

また、この活動の中で、「なぜだろう?」「もっと知りたいな」という思いを大切に、その後の思いの実現に結び付くような記録カード「なりきり記録カード1」を用意し、自由に記録できるようにした。ほとんどの児童が5枚以上書くことができた。

A児は、「ドングリをみつけたよ。」⇔「ドングリをつかって、なにかつくれるかな?つくりかたがしりたいな。」となりきりカードに記録した。ドングリを使って、ものを作りたいという思いが生まれ、それを記録しておくことで、その後、図書室に行き、遊びの本を探し、作り方を調べるといった活動へ広がっていった。休み時間には友達とドングリを拾って、製作活動を楽しむ姿も見られた。これは、なりきり記録カードを書くことによって、主体的に問題解決しようとした姿である。

B児は、「とんぼをみつけたよ。」⇔「とんぼはなにをたべるのかな?」となりきりカードに記録した。その後、図鑑で調べ、ハエを食べることが分かり、トンボを飼^{あきら}うのは難しいことに気付き、飼^{あきら}うのを諦めた。B児にとっては、新たな発見であり、生き物への思いやりの心が芽生え、これからの飼育活動に結び付く意義あるものになった。

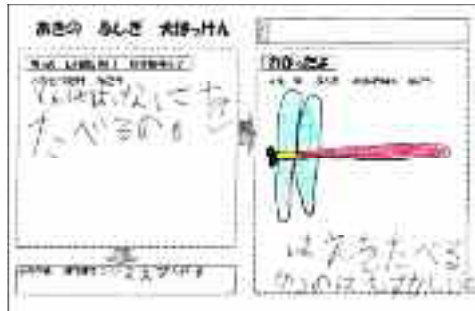
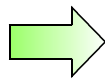
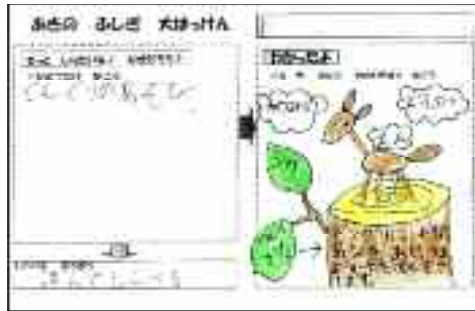
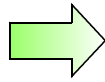
そのほかの児童も「とんぼのはねは、どうなってるの?」や、「はっぱのいろは、どうしてあかやきいろになるの?」など、「もっと知りたい」「なぜだろう?」という思いや願いがもて、次の活動を展開することができた。

児童は活動に夢中になると、その時の思いや願いが何であったか忘れてしまう。このように、「なりきり記録カード」を取り入れ、ただ探すだけでなく、思いや願いを記録しておくことで、自分の考えが明確になり、問題解決していくのに有効な手だてであったと考える。

資料3は、A児とB児のなりきり記録カードである。



資料3 「なりきり記録カード」



A児：図書室で、遊びの本を探し、ドングリを使って、シカの置物の作り方を調べて、「早くつくりたいな」とつぶやいていた。その後、休み時間に、校庭で友だちとどんぐり拾いをしていた。

B児：図鑑で調べた結果、とんぼの餌は、ハエである。トンボの難しいこと、この虫を育てたいという気持ちがない気がした。

3 活動を振り返り、自己を見つめる過程において、これまでの活動の中で気付いたことや楽しかったことを絵本や劇など自由に表現する「なりきり活動」を取り入れることは、自然と深くかかわってきた自分や友達がいたことに気付けるようにするのに有効であるか

児童は、春・夏・秋と物語として展開してきた中で、季節の国の子どもになりきって、意欲的に活動してきた。五感を使っての秋探しの活動、王様の秋の国で体全体を使って遊ぶ活動、秋の自然物を利用して遊び道具を作り、王様を招待してのお祭りというように、秋という自然の中で試行錯誤しながら過ごしてきた。そこで、これらの活動を振り返るために表現活動を取り入れた。話合いの結果、絵本づくりと劇に分かれ、表現することになった。

まず、この表現活動は、国語科の「書くこと」の内容と重複するため、国語科との合科にした。

さらに、少人数指導を取り入れ、絵本班と劇班に分け、きめ細かな指導をすることにした。

表現方法を児童に選択させた結果、絵本づくり班15名、劇班13名になった。A児は、絵本づくり班、B児は劇班を選択した。

A児は、『どんぐりのたび』という題名で、どんぐりを主人公にして、どんぐりが森の中を旅する間に、キリギリスやリス、柿の木などに会って、会話をしながら物語を展開していった。

このようにA児は、秋の自然を擬人化して物語を作った。

資料4 A児の絵本から一部抜粋

ここは、どんぐりの木がたくさんある、どんぐりの森です。・・・略
 「あっ！」となりのどんぐりの木から一つかわいいどんぐりが、かぜにのって、おちてきました。
 (き)「こんにちば。」ときりぎりすが言いました。どんぐりも(ど)「こんにちば」とはずかしそうにいいました。さあ、ここからどんぐりのたびです。
 (か)「おいしいよ。」とかきが言っています。おっと、あなからりすがでできました。でも、りすが、「あんなどんぐりいらない。」といったのでたすかりました。・・・略
 くつやのどんぐりから、虫がでてきて・・・略
 さあ、はっぱのかけにかくれて、人にひろわれるのをまぢました。(ど)「あっ！人がきた。」どんぐりはとたんに、どんなものになれるかな。(やじるべえかな、こまかな)人がひろいました。
 (い)「かわいいどんぐり みっけ。」(う)「ほんとだ。」
 (い)「これ べんきょうにつかおう。」・・・略
 どんぐりは、どきどき わくわく、どんなものになるのでしょうか。・・・略
 さあ つくる日になりました。(い)「バックをつくらう。」(う)「うん、いいとおもうけど、さきに学校でつくるマラカスだよ。」・・・略
 (う)「作りかたのかみをみて、つくらう。」・・・略
 どんぐりは、ひろってくれた いっちゃんのマラカスになりました。

注* (き): キリギリス (ど): ドングリ (か): 柿

(い): 友達 (う): 自分

資料4から分かるように、A児は、主人公のどんぐりになりきって、物語を展開していった。その中に、柿やキリギリス、葉っぱとこれまで秋探しの活動の中で、実際に見つけたものが描かれて

いる。また、ドングリから虫が出てきたという表現から、活動の中で細かいところまで観察してきたことが伺われる。

さらに、物語の展開として、最初はどんぐりを擬人化して、どんぐりになりきって自然とのかかわりを表現しているが、物語の終末には、どんぐりを利用して、友達と遊び道具を作った時の楽しかった様子が表現されている。



写真2 絵本を読み聞かせているA児

これらのことから、A児は、季節の移り変わりを体験する中で、自然と深くかかわってきた自分や友達がいたことに気付き、自然を生活の中に生かすと楽しいことにも気付くことができたと考えられる。

B児は、劇づくりを選択した。B児は、意欲的に取り組み、「この劇は、春・夏・秋の王様が登場してくるのがいい。」と提案してくれた。これまで単元を物語で展開してきたことを思い出したためと考える。また、「劇の題名は『きせつのたび』がいいよ。」と提案し、全員一致でその題名に決まった。とてもうれしそうであった。

配役を決めるときも、子ども役に立候補し、その役に決まると、満足そうであった。そして、台詞づくりになると、B児が主になって、同じ子ども役の友達と相談しながら進めることができた。

資料5 B児の考えた台詞

春：「花のふとんをつくろうか。」
「じゃあ、花をあつめよう。」
「花があつまったから ふとんをつくろうか。」

夏：「なつは、あついね。ひかげに、いこうか。」
「ひかげは、すずしいね。」
「むしでも、とろうか。」

秋：「キャンプでもいこうか。」
「森についたぞ。じゃ、てんをつくろう。」
「1びきつかまえられたぞ。」
「どんぐりがあっこつてるから、どんぐりごまをつくろう。」
「あーたのしいね。」

資料5から分かるように、B児は、春・夏・秋と体験してきたことをもとに、季節の国の子ども

になりきって、楽しそうに台詞を考えていた。

春の台詞の中に、「花のふとん」という表現があるが、これは、秋の活動の中で、「はっぱのふとん」に寝ころんだ経験から出てきたものと考えられる。また、夏の「ひかげはすずしいね。」「むしでもとろうか。」は、虫が大好きで、実生活の中での体験を表したと考えられる。さらに、秋の「キャンプでも行こうか。」という表現は、家族で行って楽しかったことを思い出し、表現したそうである。「どんぐりごまをつくろう。」は、秋の活動の中で、友達と遊んだ体験を表した。

このように 写真3 劇で子ども役を演じているB児

B児は、季節の移り変わりの中で、自然の特徴を生かし、生活と結び付けて楽しんできたことを、劇という表現活動の中で振り返ることができた。



このようなことから、単元を「季節の国」という設定で、物語として展開してきたことは、季節を身近な存在に感じ、自然と深くかかわってきた自分や友達に気付いたり、これからの生活に生かしていこうとする意欲をもたせるのに有効な手だてであると考えられる。

研究のまとめと今後の課題

- 「季節の国」という設定で、春・夏・秋と季節がつながるように物語で展開し、「なりきり活動」を取り入れたことで、自分の気持ちを自由に表出しながら、活動に没頭する姿が見られた。また、活動の中で、問題意識をもって自力解決し、自然と深くかかわろうとする態度も見られた。このように、児童を活動の中に引き込むようにしたことは、価値ある気付きを促すのに有効であったと考える。
- 物語で展開し、自然と深くかかわり価値ある気付きが促せるような表現活動や記録カード、言葉かけの工夫をしてきたが、さらに、物語の世界と現実を照らし合わせ、対象をしっかり捉えられるように支援の工夫をしていきたい。

(担当指導主事 浅見 一秋)